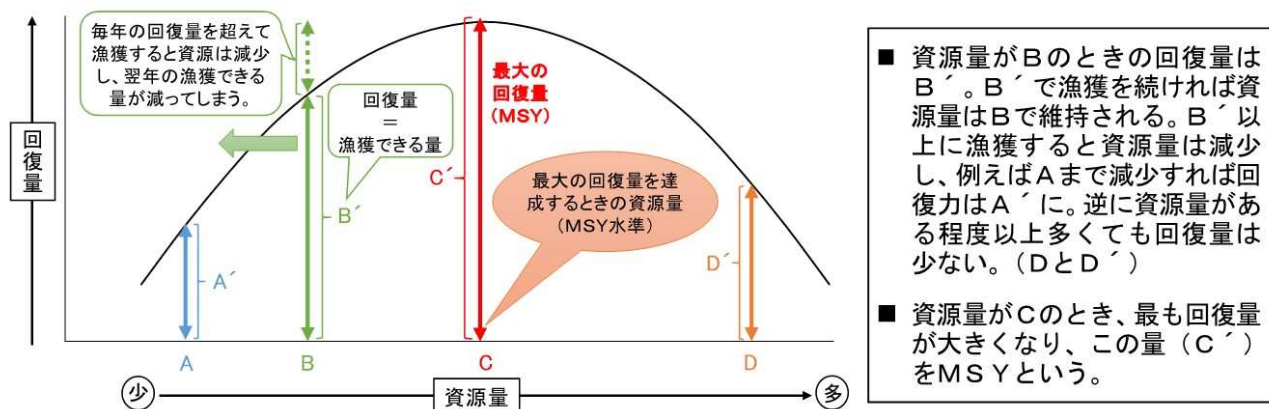


# MSYとは

水産資源については漁獲をしても親魚がある程度残っていれば産卵をして稚魚が生まれ、自然の回復力が働いて資源が回復するという性質があります。しかし、親魚が多ければ良いということではなく、餌環境等について競争があり、親魚が多すぎると、それに応じて資源量が増えるわけではないと言われています。持続的に稚魚が増える量(それ以上増えると稚魚にとって厳しい環境になるため、孵化した稚魚にとって環境がちょうど良くなる量)に親魚の資源量を維持する形で獲り続けられれば、持続的に最大限の量を獲り続けることができるという説に従って獲っていくというのがMSY理論です。

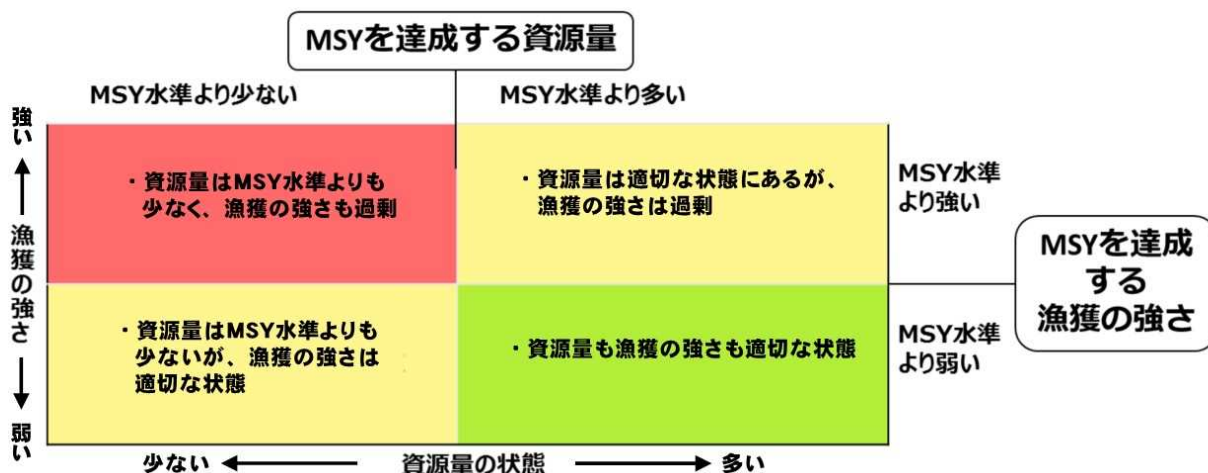
我が国でも、改正漁業法の施行により、MSYベースの資源評価に従って、資源管理を進めていくとしています。

図1：資源量と回復量の関係



今後は、横軸が計算で出したMSY水準の親魚の量に対する現行の資源水準を示し、縦軸がMSY水準の資源を達成する獲り方の圧力に対して実際にどれくらいの獲り方の圧力となっているかということを示した「神戸チャート」(図2参照)というグラフで議論することとなります。

図2：神戸チャート



左上の領域にプロットが位置する場合は、MSY水準に対して、親魚の量が少なく、漁獲圧が高いということを示します。ここに判定された場合は、獲りすぎの状況を解消して資源回復を待つ必要があります。逆に、右下にプロットが位置する場合、MSY水準に対して親魚の量が多く、漁獲圧が低い状況に保たれているということを示します。ここに位置する場合は、現状以上に漁獲制限をする必要はありません。逆に、現状よりももう少し獲っても良いということになります。